# 平成 29 年度　各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

| 事務所名 | 県南教育事務所 | 学校名 | 一関市立一関中学校 | ＴＥＬ | 0191-23-5120 |
|---|---|---|---|---|---|

## 教科の枠をこえた授業改善の取組

**【今年度の目標】**

（１）諸検査において，系統比較のなかで，各教科における正答率 50%未満の層の割合を２%減らし，80%以上の層の割合を２%増やす。

（２）県学調の各教科の正答率を岩手県比較 100 以上にする。

（３）県学調の質問紙「学級の友達との間で話し合う活動を通して，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思いますか。」の項目において，肯定的に答える生徒の割合を 85%以上にする。

（４）県学調の質問紙「〇〇の勉強が好きですか。」の項目において，各教科肯定的に答える生徒の割合を 75%以上にする。

**【組織的な対応を図る上で工夫した点】**

（１）各教科における「考える力」を身に付けた生徒像の設定

（２）思考を揺さぶる場を工夫した授業実践

（３）教科指導における日常的な取組

**【具体的な取組】**

（１）各教科における「考える力」を身に付けた生徒像の設定

①全体像

課題について自分の考えをもち，根拠を基に理由付けをしながら解決できる生徒

②教科における生徒像

| | |
|---|---|
| 国　語 | ・自分の思いや考えを的確な根拠を基に，伝えることができる生徒 |
| 社　会 | ・適切な資料を選択できる生徒<br>・資料を適切に読み取り解釈できる生徒<br>・複数の資料を多面的，多角的に見ることができる生徒<br>・資料（事実）からこれからを推測できる生徒 |
| 数　学 | ・自ら考え，主体的に課題に取り組む生徒<br>・既習事項や他者の考えを基に論理的に考え表現できる生徒 |
| 理　科 | ・目の前の事実から，それが起こる理由を科学的に考え，話し合いの中で自分の考えを発表できる生徒 |
| 英　語 | ・習ったことを用いて，英語で積極的に表現できる生徒<br>・表現の基礎を確実に身につける生徒 |

（２）思考を揺さぶる場を工夫した授業実践

本校では「思考を揺さぶる場」を「生徒が自覚的に思考する状況を，授業者が意図的に作り出す場面」と定義した。思考を揺さぶる場を設定することで，生徒が授業の目標に迫りやすくなり，さらには，考えたことを自信をもって表現するようになり，「考える力」が身に付いていくと考えた。

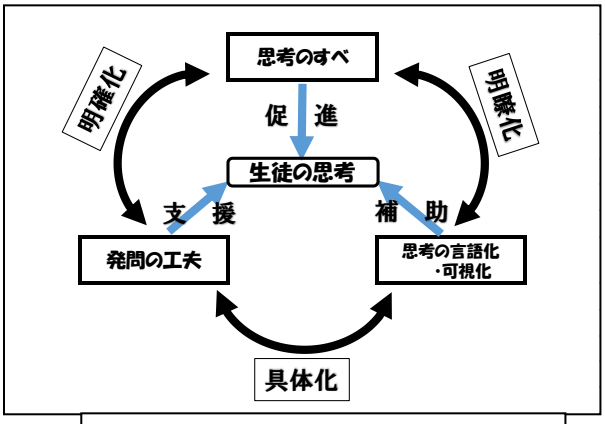
思考を揺さぶる場の工夫は次の３点である。

①「思考のすべ」を活用した授業

②「授業者の発問の工夫」

③「思考の言語化・可視化」

これによって，生徒の思考を「促進」させ，「支援」でき，「補助」できると考えた。**（図１）**



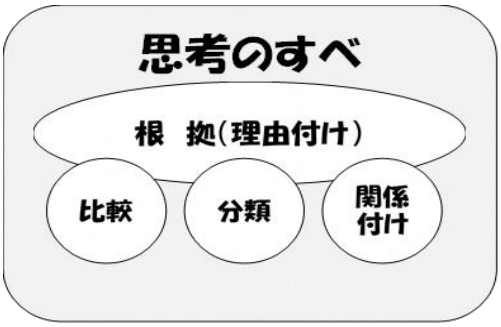

思考を揺さぶる場の相関図**（図１）**

①「思考のすべ」を活用した授業

「思考のすべ」とは，栃木県教育総合センター『思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』で紹介されているもので，生徒が自覚的に思考できるようになるための技法である。「思考のすべ」として，次の「比較」「分類」「関係付け」「理由付け」の四つが紹介されており，本校でもこの四つの思考操作を取り入れ，授業実践を行った。「比較」「分類」「関係付け」「理由付け」は**図2**のようになる。

| | |
|---|---|
| 比　較 | •ある視点に従って，複数の事象（情報）の共通点や相違点などを明らかにすること。 |
| 分　類 | •ある視点に従って，複数の事象（情報）をグループ分けすること。 |
| 関係付け | •既習事項や経験などと事象（情報），または2つ事象（情報）どうしを結び付け，意味づけること。 |
| 理由付け | •考えや意見の根拠を明示すること。 |

※事象（情報）：ここでは，文章・現象・図・絵・グラフ・資料・観察・実験等から得られたことや考え・意見などを意味する。




【「思考のすべ」の関係図】（**図2**）

**H28 栃木県教育総合センター**
**「思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」より**

②「授業者の発問の工夫」

どのように発問をすれば生徒の思考が活発化するのか，生徒たちが「思考のすべ」を使用した活動が行いやすくなるのかなど，授業者側が十分検討して授業に臨み，発問によって生徒の思考を止めないようにした。また，「思考のすべ」を活用するときの発問の例を全教科で共有した。（**図3**）

**「思考のすべ」の「比較」の発問の一例（図3）**

**示された視点による比較**
- 「ＡとＢを〇〇で比べてみましょう。」
- 「〇〇に注目したとき，ＡとＢの共通点（違い）は何ですか。」

**自分で決めた視点による比較**
- 「ＡとＢをいろいろな視点で比べてみましょう。」

**視点を見いだす比較**
- 「ＡとＢの共通点（違い）は何ですか。」

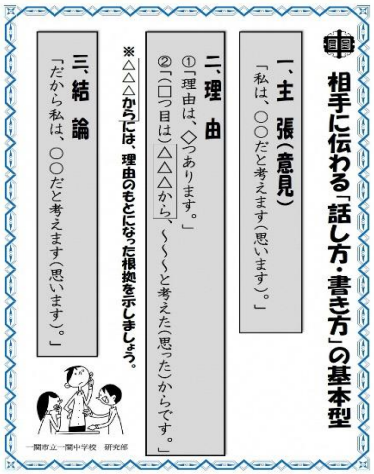
**検　討**
- 「ＡとＢの共通点（違い）から，△△についてどのように考えますか。」
- 「いちばん□□なのはどれですか。」

**H28 栃木県教育総合センター**
**「思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」より**

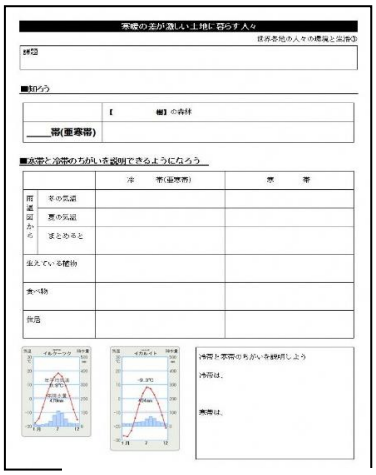
③「思考の言語化・可視化」

生徒の思考を言語化・可視化することは，生徒にとって「比較」「分類」「関係付け」の状況が明瞭化され，生徒の思考を補助する役割を果たすものとして重要と考えた。また授業者にとっては，授業者の発問が有効であったか具体的な形で把握することができたり，生徒がどのように思考したかを見取ったりできるよさがある。本校では，教科の特性を活かしながらも次の点を共通事項として実践した。

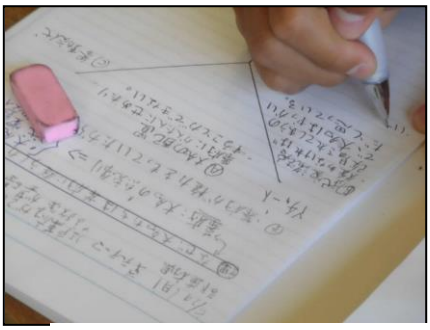
ア　一関中学校の基本的な話型を用いた発表をする。（**図4**）
イ　学習活動に応じてワークシート（**図5**）やシンキングツール（**図6**）などを活用する。
ウ　振り返りシートなどを活用して思考の見取りと評価を行う。




**一関中学校の基本的な話型（図4）**




**社会科ワークシートの一例（図5）**



**シンキングツールを活用したノート（図6）**

（３）教科指導における日常的な取組

各種調査結果の分析から，学力保障取組の重点を設け，授業の工夫や家庭学習の内容を工夫する取組を行った。

| | |
|---|---|
| 国語 | ・音読を徹底した。<br>・百字作文の取組とその交流により，「書くこと」への意欲を高めるとともに，要約する力を付けさせた。 |
| 社会 | ・地図の読み方や世紀の表し方など基礎的な技能について，家庭学習と連動し類似問題に取り組ませた。<br>・資料を基に思考させる授業を意図的に行った。 |
| 数学 | ・授業と連動した「数学の宿題」を毎日作成し取り組ませた。<br>・過去に正答率が低かった問題の類似問題を作成し，日々の宿題や授業の確認問題に取り入れていった。 |
| 理科 | ・授業中に「１０問テスト」を実施し，基礎基本の定着を図った。<br>・演習問題の量を増やし，家庭学習と授業とのリンクを図りながら復習させた。 |
| 英語 | ・単元を通して，４つの技能を効果的に習熟させるため，ペアやグループでの活動を意図的に組み入れた。<br>・書いたり発表したりしたものを記録として残し，いつでも振り返られるようにした。 |

**【成　果】**

○「考える力」を身に付けた生徒像にせまる各教科の実践の成果は次のとおりである。

| | 成　　果 |
|---|---|
| 国語 | ・課題設定場面において，「どのように」「なぜ」の課題のほうが，生徒も取り組みやすく，主体的に学習する姿勢につながった。<br>・言葉の共通点，相違点を確認する場面では，「思考のすべ」を用いたことにより，比較ができ，自分のことばで伝えることができた。 |
| 社会 | ・課題設定場面において，思考を揺さぶる場を設定したことで，社会的事象の意味や意義について考える姿勢が見られるようになり，主体的に学習する姿勢につながった。<br>・「思考のすべ」を用いることによって，資料の読み取りだけに終始せず，社会的事象に対する自分の考えを適切に表現する生徒が増えた。 |
| 数学 | ・「図・ことば・式」を関係付けて考えさせたり，友だちの考えと自分の考えを比較して考えさせたりすることで，生徒の主体的に学習する姿勢につながった。<br>・自分の考えを伝え合う場を設定してきたことで，少しずつではあるが，根拠をもって自分の考えを表現することができるようになってきた。 |
| 理科 | ・日常生活における様々な現象や既習事項に関係付けることで生徒の関心や意欲が高まり，学習課題の設定も，ある程度のイメージを持って行うことができるようになった生徒が増えてきた。<br>・実験の技能や得られたデータの処理では速さ，正確性で向上が見られ，自分なりの考察をまとめることができる生徒が徐々に増えてきた。 |
| 英語 | ・課題設定場面において，思考を揺さぶる場を設定したことで，対話の流れの組み立て方やその場面に合う内容を意識して表現しようとする姿勢が見られるようになった。<br>・「思考のすべ」を用いることによって，他の人の表現から学んだことを自分の表現に活かそうとする生徒が増えた。 |

〇今年度の目標の達成状況は次のとおりである

（１）諸検査において，系統比較のなかで，各教科における正答率 50%未満の層の割合を 2%減らし，80%以上の層の割合を２％増やす。

| ２年生 | 国　　語 | | 数　　学 | |
|---|---|---|---|---|
| | 50%未満 | 80%以上 | 50%未満 | 80%以上 |
| H28 中１新入生調査 | ３９ | １３ | １３ | ３２ |
| H29 県学調 | ３６ | １４ | ５３ | ５ |
| 比較 | 〇 | △ | × | × |

中１新入生調査と県学調では，問題の質が全く違うため，単純な比較はできない。バブルチャートで中１新入生調査と県学調を分析すると，次のような結果になった。

国語の中下位層 34.9%→23.8%，中上位層 15.1%→23.8%
数学の最下位層 31.4%→22.8%，最上位層 11.6%→12.7%

国語と数学ともに，下位層の底上げができていることがわかる。

（２）県学調の各教科の正答率を岩手県比較 100 以上にする。

すべての教科で県比 100 以下だった。しかし国語と数学は，中１新入生調査より 100 に近づいてきている。また「出題の趣旨」や「調査問題のねらい等」の中で，本校の「考える力」に関連が大きいと思われる項目を抽出し考察してみると，数学，社会において県比 100 をこえた。これは，数学は，解答の見当がつきやすく，考える道筋が立てやすい傾向があり，地理的分野は歴史的分野よりも資料を比較したり関連付けたりしやすい傾向にあるため，生徒にとって説明しやすかったと推測される。

（３）県学調の質問紙「学級の友達との間で話し合う活動を通して，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていると思いますか。」の項目において，肯定的に答える生徒の割合を 85%以上にする。

肯定的に答える生徒の割合は，83%と目標値に近づいている。

（４）県学調の質問紙「〇〇の勉強が好きですか。」の項目において，各教科肯定的に答える生徒の割合を 75%以上にする。

すべての教科で肯定的に答える生徒の割合は 75%に届かなかったが，「〇〇の授業の内容はよく分かりますか。」の項目において，肯定的に答える生徒の割合が，国語，数学，社会で 75%以上になった。

目標設定を単純に分布度数の前年度比較や系統比較にしてしまうと，問題内容の質や生徒の実態の違いのため，簡単には比較できないことが分かった。分析にバブルチャートを活用したことで，生徒の学力の伸びを把握することができた。また，生徒の実態から学力分析も観点や領域などを限定することで，これまでの取組成果や課題が見えてきたと思う。